



学校だより

一人一人が主人公

【 学校教育目標 : ふるさとの未来を創る 自分をつくる 但東の子 】

令和7年7月18日
豊岡市立但東中学校
7月号

演劇的手法とコミュニケーション能力

明日から夏休みに入ります。保護者の皆様・地域の方々の温かい見守りとお力添えのお陰で、大きな事故やけがもなく1学期を無事に終えることができました。本当にありがとうございました。

さて先日、1年生を対象とした「コミュニケーション授業」が実施されました。これは豊岡市が独自に推進している「演劇的手法」を取り入れた学習カリキュラムの1つです。皆さんご存じでしょうか。コミュニケーション能力は、グローバル化が進む現代社会において特に重要とされる能力の1つですが、なぜコミュニケーション能力育成のためにこのような特別なカリキュラムが組まれ実施されているのでしょうか。

よく海外の方から日本人は「何を考えているのかわからない」「表現があいまいだ」といった否定的な認識をされることがあります。これは日本には「皆（みな）まで言うな」「出る杭は打たれる」といった言葉があるように、古来よりあまり多くを語る（主張する）ことを美德とせず、「慎み深さ」や「奥ゆかしさ」を尊び、「空気を読む」「行間を読む」といった日本独特の文化が私たちの生活に深く根付いているからではないかと思います。

日本が持つこれら独特のコミュニケーション文化は、世界のスタンダードなコミュニケーション文化からすれば難解でわかりにくく、勘違いや誤解を招く原因ともなってしまう。よってグローバル化が進む現代社会においては、よりシンプルでわかりやすいコミュニケーション文化の習得が必要とされているのです。では「シンプルでわかりやすいコミュニケーション」とは何かという事になりますが、それは「豊かな感情表現と意思表示」、「話し合いによる相互の合意形成」です。

これらはどちらかと言うとこれまで日本人があまり得意としてこなかった分野です。その抵抗感のハードルを下げる役割を担うのが「演じること（演劇的手法）」です。演じている間は別人ですから本当の自分とは異なります。



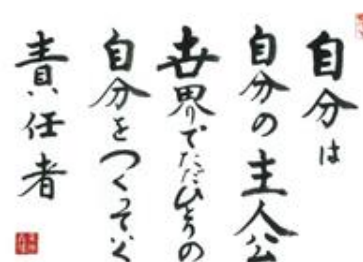
自分自身の持つ日本人らしさ（自分らしさ）は保持しつつ、別人を演じることで「シンプルでわかりやすいコミュニケーション」を体験的に学習することができます。

改めて考えてみれば、私たち大人も家庭と職場では全く別人のような振る舞いをしていることに気が付きます。子どもの頃にはそんな大人の行動の変化に違和感を覚えていたものですが、自らの成長と共にいつの間にかそれが当たり前になってしまいました。言い換えれば、私たち大人はある意味異なる人格を無意識のうちに演じ分けることで社会に適応しているとも言えます。それを子どもたちに体験的に学習させるプログラムとしての機能も「演劇的手法を取り入れたコミュニケーション授業」にはあるのかもしれませんが。

特別支援学級から学ぶ社会的自立の本質

本校には「やまびこ学級（特別支援学級）」に在籍して学習している生徒が7名います。それ以外の生徒は「通常学級」に在籍して学習していますが、「支援を要しない生徒は誰一人としていない」という理念を鑑みれば、「通常学級」は正しくは「通常支援学級」と言うべきではないかと私は思います。では特別支援学級は何が特別なのかということになりますが、端的に言えば「学習カリキュラム（学習目的と内容）」が特別ということになります。

特別支援学級は「社会的自立に向けた学習または日常生活や社会生活の適応の困難さを克服する」ことが主たる目的ですから、「自立」や「生活」支援のための特別なカリキュラム（授業）の実施が必須です。教科学習についても、ただいたずらに高度な内容の習得を目指すのではなく、生活への適応を主眼とした内容の学習を実施する必要があります。また社会への適応を目的とした多人数集団（通常学級）との交流も可能な限り実施しなければなりません。



一方で、通常学級の自立等の分野については、日々の学習活動の中で横断的な支援を行っています。また教科学習は定められた内容を全国一律に実施しています。そのため特別ではなく通常（学級）という学習形態になっているのです。しかしどちらの学習形態であっても、その本質は「自らの持つ資質・能力の向上と社会的自立を目指す」ことに変わりはありません。むしろどちらかと言えば、特別支援学級の方が個別の社会的自立に向けてより明確な目的を持っていると言えます。

通常学級の生徒もいつまでもみんなと同じではられません。東井義雄先生の言葉に、「人生は ほんとうの私に めぐりあうための 旅」という一節があるように、いずれ誰もが自らの適性や資質・能力に応じて悩みながらも進学先や就職先を選択し、自己理解という紆余曲折を繰り返しながら社会的自立を目指していくのです。特別支援学級の生徒もそれと同じです。特別支援学級に在籍している生徒は、悩みながらも自身の適性や資質・能力に応じて他の生徒よりも少しだけ早く社会的自立を目指しているのです。

人生はその良し悪しを一律に物差しで判断できるようなものではないのですから、その選択に優劣はありません。むしろ尊重されるべきものなのです。私は改めてそう思います。

